殺生石

殺生石ハ温泉の出る山陰に有。石の毒気いまたほろひす、蜂・蝶のたくひ、真砂の色の見へぬほとかさなり死す。又、清水なかるゝの柳ハ、芦野の里にありて、田の畔にのこる。此所の郡守戸部某の、「此柳見せはや」など、折々の給ひ聞へ給ふを、いつくのほとにやとおもひしを、けふ此柳のかけにこそ立より侍れ。

田一枚植て立去柳哉

芦野

白河

こゝろもとなき日かす重なるまゝに、白河の関にかゝりて旅心定りぬ。いかて都へと便求しもことハり也。中にも此関ハ三関の一にして、風騒の人、心をとゞむ。秋風を耳に残し、紅葉を傾にして、青葉の梢なをあハれ也。うの花の白妙に、茨の花の咲そひて、雪にもこゆるこゝ地そする。古人冠を正し衣装を改し事など、清輔の筆にもとゞめ置れしとそ。

うの花をかさしに関のはれ着哉　曽良

左に会津根高く、右に岩城・相馬・三春の庄、常陸・下野の地をさかひて山つらなる。かけ沼と云所を行に、けふハ空曇て物影うつらす。すか川の駅に等窮といふものを尋て、四、五日とゞめらる。先、「白河の関いかにこへつるや」と問。「長途のくるしみ、身心つかれ、且は風景に魂うハゝれ、懐旧に腸をたちて、はかゝしうおもひめくらさす。風流のはしめやおくの田植うた無下にこえんもさすかに」とかたれは、脇・第三とつゞけて三巻となしぬ。

影沼

此宿のかたはらに大なる栗の木陰をたのみて、世をいとふ僧有。橡ひろふ太山もかくやと、問に覚へられて、ものに書付侍る。其詞、

栗といふ文字ハ、西の木と書て、西方浄土に便ありと、行基菩薩の一生、杖にも柱にも此木を用給ふとかや。

世の人の見付ぬ花や軒の栗

1) 道のべに清水ながるゝ柳蔭しばしとてこそ立ちどまりつれ（西行）

2) たよりあらばいかで都へ告やらん けふ白河の関は越えぬと（平兼盛）

3) 都をば霞とともに立ちしかど秋風ぞ吹く白河の関（能因法師）

4) もみじ葉の皆くれなゐに散しけば名のみなりけり白河の関（在原元平親王）

5) 都にはまだ青葉にて見しかども紅葉散りしく白河の関（源頼政）

6) 見こゆる人しなければ知る人も咲る梅花や白河の関（藤原季通）

7) 東路も年も末にやなりぬらん雪ふりにけり白河の関（伊都部仲）

8) 藤原清輔「袋草子」に竹田大夫国行逸話

1) みちのくの浅香の沼の花かつみかつ見る人に恋ひやわたらむ（古今和歌集恋四よみ人しらず）

2) みちのくのしのぶもぢずり誰ゆゑにみだれ染めにしわれならなくに（百人一首 河原左大臣源融）

日和田 浅香

等窮か宅を出て五里はかり、桧皮の宿を離れてあさか山有。路より近し。此あたり沼多し。かつみ刈比もや、近うなれハ、「いつれの草を花かつみとは云そ」と人々に尋れとも、更知人なし。沼を尋、人にとひて、「かつみ〳〵」と尋ありきて、日ハ山の端にかゝりぬ。二本松より右にきれて、黒塚の岩屋一見し、福しまにやとる。あくれハ、しのふもぢ摺の石を尋て、しのふの里に行。遠山陰の小里に、石半土に埋てあり。里の童部の来りて教ける、「昔ハ此山の上に侍しを、往来の人の、麦草をあらして此石を試侍るをにくみて、此谷につき落せハ、石の面下さまにふしたり」と云。さも有へきことにや。

早苗とる手もとや昔しのふ摺

信夫

黒塚の岩屋

忍ぶ摺

月の輪のわたしを越て、瀬の上と云宿に出つ。佐藤庄司か旧跡ハ、左の山際一里半に有。飯塚の里鯖野と聞て、尋〳〵行に、丸山と云に尋あたる。是庄司か旧舘也。禁に大手の跡なと、人の教にまかせて泪を落し、又、かたハらの古寺に一家の石碑を残す。中にも二人の嫁かしるし、先あハれ也。女なれとも、かひ〳〵しく名の世に聞へつる物かなと、たもとをぬらしぬ。墮涙の石碑も遠きにあらす。寺に入て茶を乞へハ、こゝに義経の太刀・弁慶か笈をとゞめて什物とす。

笈も太刀も皐月にかされ紙幟

瀬の上

飯塚

佐藤庄司跡

丸山

4) 中国故事。晉代湖北省襄陽の守羊祜の徳を偲ぶ碑を読むと涙もろくなったという。

3)

五月朔日の事なり。其夜飯塚にとまる。温泉あれは、湯に入て宿をかるに、上坐に蓮の火影に寝所をまうけて臥す。夜に入て雷鳴、雨しきりにふりて、臥るうへより雨もり、蚤・

飯塚

飯坂

1）枯ちもせぬ　その名ばかりをとどめ置きて　枯野のすゝき形見にぞ見る（西行）
2）藤原実方塚　通過　3）武隈の松はこのたび跡もなし千歳をへてや我は来つらむ（能因）

蚊にせゝられて眠らす。持病さへおこりて、消入はかりになむ。みじか夜の空もやう〳〵明れは、又たひたちぬ。猶夜の余波こゝろすゝます。馬かりて桑折の駅に出る。はるかなる行末をかゝえて、かゝる病おほつかなしといへと、「羇旅辺土の行脚、捨身無常の観念、道路にしなむ、是天の命なり」と、気力いさゝか取直し、路縦横に踏て、伊達の大城戸をこす。鐙摺・白石の城を過、笠嶋の郡に入れは、「藤中将実方の塚ハいつくのほとならむ」と人にとへは、「是よりはるか右に見ゆる山際の里をみのわ・笠嶋と云、道祖神の社・かたみのすゝき今なをあり」と教ゆ。このころのさみたれに道いとあしく、身つかれ侍れは、よそなから眺やりて過るに、箕輪・笠嶋も五月雨のおりにふれたりと、かさしまハいつこさつきのぬかり道1）

桑折
大木戸
鐙摺
白石
笠嶋
箕輪
岩沼
武隈

岩沼にやとる。

武隈の松にこそめ覚るこゝちハすれ。松ハ土際より二木にわかれて、昔のすがたうしなハすとしらる。

先能因法師おもひ出。往昔、むつのかみにて下りし人2）、この木を伐て、名取川の橋杭にせられたることあれはにや、3）まつハこのたひあともなし」とハよみたり。代々、あるハ伐、或補継なとせしと聞に、今将千歳のかたちと、のほひて、めてたき松のけしきになん侍し。

たけくまの松見せ申せ遅さくら、と、

挙白といふもの、餞別したりけれは、

さくらより松ハ二木を三月越4）

名取川をわたりて仙台に入。あやめふく日也。旅宿をもとめて四、五日逗留す。

（五月四日）
仙台

こゝに画工加右衛門といふもの有。いさゝか心有者と聞て知人になる。このもの、「としころさたかならぬ名ところを考置侍れは」とて、一日案内す。宮城野の萩しけりあひて、秋のけしきおもひやらる、。

1）蚊にせゝられて眠らす　2）藤原孝義　3）木鳥のつらの枕ひきもなし　むべさへけらし十符の菅菰（源経信）　4）まれにだに十符の浦風訪れば野田の松蓬かたしきやせん（鴨長明）

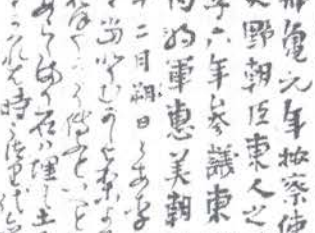
王田
横野
躑躅岡

玉田・よこ野・つゝしか岡ハ、あせひ咲ころ也。日影ももらぬ松の林に入て、こゝを木の下といふとそ。昔もかく露ふかけれはこそ、5）「みさふらひみかさ」とハよみたれ。薬師堂・天神の御社なと拝て、其日ハくれぬ。猶松しま・しほかまの所々画に書て送る。

且、紺の染緒つけたる草鞋二足餞す。されはこそ風流のしれもの、こゝに至りて其実を顕す。

あやめ艸足に結ん草鞋の緒

かの画図にまかせてたとり行ハ、おくのほそみちの山際に十符の菅有。今も十符の菅こもを調て、国守に献すと云り。



壺碑　市川村多賀城に有。

つほの石ふミハ高サ六尺余、横三尺ばかりか。苔をうかちて文字幽なり。四維国界の数里をしるす。此城、

神亀元年、按察使兼鎮守府将軍大野朝臣東人之所置也。天平宝字六年、参議東海東山節度使、同将軍恵美朝臣朝獦修造也。十二月朔日」とあり。聖武皇帝の御時に当れり。むかしよりよみ置るうたまくら、おほくかたり伝ふといへとも、山崩川落て道あらたまり、石ハ埋て土にかくれ、木ハ老て若木にかハれは、時うつり代変して、其跡たしかならぬ事のミを、こゝに至りてうたがひなき千歳のかたみ、今眼前に古人の心を閲す。行脚の一徳、存命の悦ひ、羇旅の労をわすれて、なみたも落るはかり也。

5）みさふらひみかさと申せみやきのの木の下露は雨にまされり（古今東歌）

3) 君を置きて仇しこころ
我が持たば末の松山
波も越えなむ
（古今集六歌所）

西

3) 契りきなかたみに袖を
しぼりつゝ末の松山
浪こさじとは
（清原元輔）

石高六尺五分　幅三尺四寸
多賀城去京一千五百里
去蝦夷国界一百廿里
去常陸国界四百十二里
去下野国界二百七十四里
去靺鞨国界三千里
此城神亀元年歳次甲子按察使兼鎮守将軍従四位上勲四等大野朝臣東人之所置
也天平宝字六年歳次壬寅参議東海東山節度使従四位上仁部省卿兼按察使鎮守将軍藤原恵美朝臣朝獦修造也
天平宝字六年十二月一日
日本風土記曰陸奥国宮城郡坪碑在鴻之池
為故鎮守府門碑恵美朝獦立之見雲真人
清書也記異域本邦之行程令旅人不為迷途

6) 世の中はつねにもがもな
渚こぐ海人の小舟の
網手かなしも
（源実朝）

みちのくのいはてしのふハえそしらぬ書つくし
てよつほの碑　右大将
源頼朝
陸奥ハおくゆかしくそおもほゆるつほのいしふ
みそとのほま風　西　行

7) みちのくはいづくにあれど
塩がまの浦こぐ舟の
綱手かなしも
（古今集六歌）

多賀城事始見続日本記聖武皇帝天平九年
夏四月記
神亀元年甲子廼聖武帝元年至安永八年巳亥
千七十五年
天平宝字六年壬寅廼廃帝四年至安永八年
巳亥千三十七年

1) 野田の玉河　2) 沖の石　3) 末の松山　4) 末も心　5) 塩竈の浦　6) 多月夜幽に、籬か嶋もほと近し。　7) 塩竈の小舟

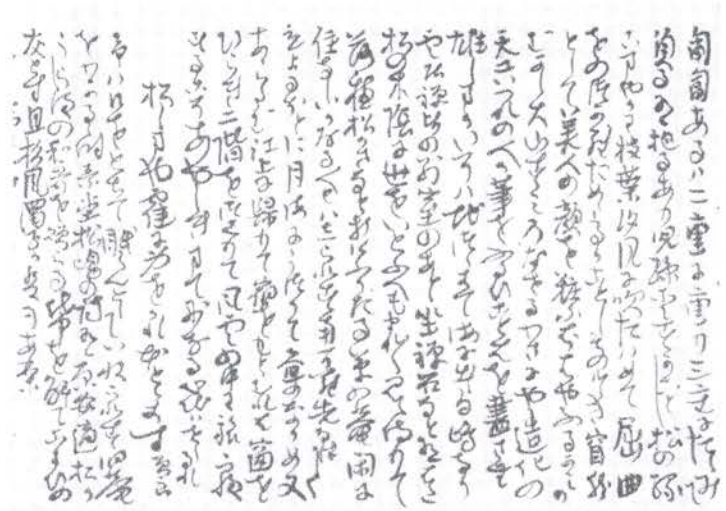
それより野田の玉河・沖の石を尋ぬ。末の松山ハ寺を造て末松山といふ。松のあひ〳〵みな募ハらにて、羽ねをかハし枝をつらぬる契の末も、終にハかくのごときと、悲しさもまさりて、塩竈の浦に入相を聞。五月雨の空いとかすかに晴て、多月夜幽に、籬か嶋もほと近し。蜑の小舟にこきつれて、肴わかつ声々に、「つなてかなしも」とよみけむ古々路もしられて、いと〻あハれ也。其夜、目盲法師の琵琶をならして、奥上るりと云物をかたる。平家にもあらず、舞にもあらず、ひなひたる調子うち上て、枕ちかうかしましけれと、さすかに辺土の遺風忘れさるものから、殊勝に覚へらる。早朝、塩かまの明神に詣。国守再興せられて、宮柱ふとしく、彩縁きらひやかに、石の階九仞に重り、朝日あけの玉かきをか〻やかす。か〻る道のはて、廛土の境まて、神霊あらたにましますこそ吾国の風俗なれと、いと貴けれ。神前古き宝灯有。かねの戸ひらの面に、「文治三年和泉三郎寄進」と有。五百年来の俤、今目の前にうかひて、そ〻ろにめつらし。かれハ勇義忠孝の士也。佳命今に至りてしたハすといふことなし。誠「人能道を勤め、義を守るへし。名も又是にしたかふ」と云り。日既午にちかし。船をかりて松嶋にわたる。其間

2) 栗原のあねはの松の人ならば都のつとにいざと言はましものを（在原業平）

1) 松島や雄島の磯にあさり せし海人の袖こそかくはぬれしか（源重之）

4) すめるぎの御代栄えむとあづまなるみちのくの山に黄金花咲く（大伴家持）

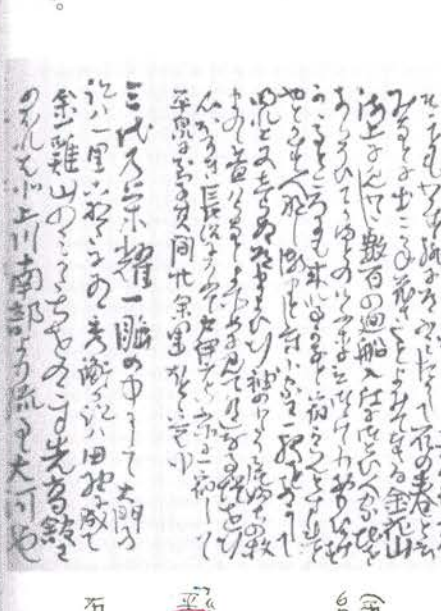
3) みちのくの末だえやこれならむ踏み踏まずみ心惑はす（石京大夫道雅）



雲居禅師の別室のあと、坐禅石なと有。はた松の木陰に世をいとふ人もまれく見へ侍りて、落穂・松かさなと打けふりたる草の庵閑に住なし、いかなる人とハしられすなから、先なつかしく立よるほとに、月海にうつりて、昼のなかめ又あらたむ。江上に帰りて宿をもとむれは、窓をひらき二階をつくりて、風雲の中に旅寝するこそ、あやしきまて妙なる心地ハせらるれ。

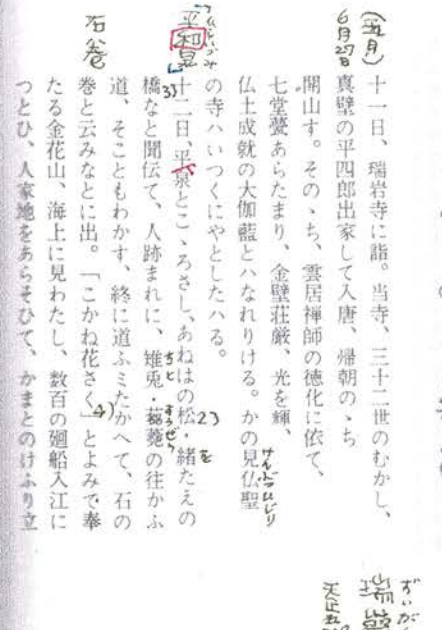
松しまや鶴に身をかれほと、きす　曽良

予ハ口をとちて眠らんとしていねられす。旧庵をわかる、時、素堂、松嶋の詩有。原安適、松かうらしまの和歌を贈らる。袋を解て、こよひの友とす。且杉風・濁子か発句あり。



十一日　瑞巌寺に詣。当寺、三十二世のむかし、(五月)6月23日　真壁の平四郎出家して入唐、帰朝の、ち開山す。その、ち、雲居禅師の徳化に依て、七堂甍あらたまり、金壁荘厳、光を輝、仏土成就の大伽藍とハなれりける。かの見仏聖の寺ハいつくにやとしたハる。

十二日、平泉（知見）とこ、ろさし、あねはの松・緒たえの橋なと聞伝て、人跡まれに、雉兎・蒿蕨の往かふ道、そこともわかす、終に道ふミたがへて、石の巻と云みなとに出。「こがね花さく」とよみて奉たる金花山、海上に見わたし、数百の廻船入江につとひ、人家地をあらそひて、かまどのけふり立



北河ハ和泉守と申て、すなをなる人にて、大河を舟入して、衣川を尋ねて、高館に登る。北は大海に入て、南部領を見渡す。衣川ハ秀衡が城をかまへて、要害とす。高館ハ義経の居城、忠臣ハ此城に籠て、一時の義に成る。国破て山河あり、城春にして草木深し、と、口ずさみて、時の移るまで、涙を落侍る。

夏草や兵どもが夢の跡

卯の花に兜を埋む夏草や　芭蕉

かねて耳にとまる所、二堂開帳す。経堂ハ三将の像をのこし、光堂ハ三代の棺を納め、三尊の仏を安置す。七宝ちりうせて、珠の扉風にやぶれ、金の柱も雪に埋て、跡形なく成て、三世の栄耀、一睡の中に成て、大門の跡ハ一里こなたに有と、人皆語伝へ侍る。秀衡が居館ハ、田野に成て、金鶏山のみ残る。まさに三代の栄耀、一睡の夢と

5) みちのくの袖のわたりの涙がは心のうちに流れてゞすむ（相模）　6) みちのくのをぶちの駒を野飼ふにはあれこそまされなつくものかは（読人知らず「後撰集」）

7) 藤原三代（清衡・基衡・秀衡）

つゝけたり。おもひかけすかゝるところにも来れるかなと、宿からんとすれと、やとかす人なし。漸まとしき小家に一夜をあかして、明れは又しらぬ道まよひ行。袖のわたり・尾ふちの牧・まの、萱ハらなと、よそめに見て、遙なる堤を行。心ほそき長沼にそふて、戸伊麻といふ所に一宿して、平泉に至る。其間廿余里ほとゝ覚ゆ。三代の栄耀一睡の中にして、大門の跡ハ一里こなたに有。秀衡か跡ハ田野に成て、金鶏山のミかたちをのこす。先高舘にのほれは、北上川南部より流るゝ大河也。衣河ハ和泉か城をめくりて、高舘の下にて大河に落入。康衡等か旧跡ハ、衣か関をへたてゝ、南部口をさし固め、夷を防くと見えたり。さても義臣をすくつて

袖の渡り
尾駮の松
真野の萱原
戸伊麻
平泉

此城にこもり、功名一時の叢となる。「国破れて山河有、城春にして草青みたり」と、笠うち敷て、時のうつるまてなみたを落し侍ぬ。

夏艸や兵ともか夢のあと　　曽良

うの花に兼房みゆる白毛かな

中尊寺

かねて耳おとろかしたる二堂開帳す。経堂ハ三将の像をのこし、光堂は三代の棺を納め、三尊の仏を安置す。七宝ちりうせて珠の扉風にやふれ、金の柱霜雪に朽て、既頽廃空虚の叢となるへきて、四面あらたに囲て、甍を覆て、風雨をしのき、しはらく千歳のかたみとハなれり。

さみたれのふりのこしてや光堂

8) 枯尾「春望」

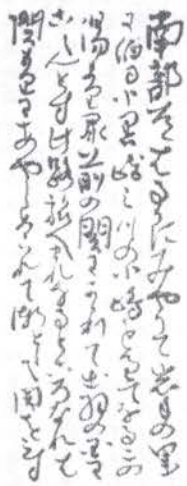
国破山河在
城春草木深
感時花濺涙
恨別鳥驚心

（ほうかさんがつにつらなり
烽火連三月
かしばんきんたるに
家書抵萬金
ぼくとかけばさらにみじかく
白頭搔更短
すでしんにたへざらんとほっす
渾欲不勝簪

（はなもなみだをそそぎ）
（ひとりもこころをおどろかす）

7) みちのくの真野の萱原遠けどもおもかげにして見ゆとふものを（笠女郎「万葉集」）
まだ見ねばおもかげもなしなにしかも真野の萱原露乱るらむ（雅大納言の頭中「続古今和歌集」）

〔下巻〕



南部道はるかにみやりて、岩手の里に泊る。小黒崎・みつの小嶋を過て、なるこの湯より尿前の関にかゝりて、出羽の国にこへんとす。此路、旅人まれなるところなれは、関もりにあやしめられて、漸として関をこす。